

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520314

研究課題名(和文)近代英国を中心とするエンブレムにおける宗教と科学に関する学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research on the Representation of the Religious and Scientific Emblems Principally in Early Modern Britain

研究代表者

植月 恵一郎 (UETSUKI, Keiichiro)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：10213373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、初期近代英国文学とエンブレムの関係を明らかにすることを主たる目的とした。代表的な成果は以下の通りである。Fortunaのエンブレムと『ヴェニス商人』のfortune、lotteryなどとの関係、蝸牛のエンブレムとラヴレイスの詩「蝸牛」との関係などを詳細に分析した。

ペイコンの『大革新』のフロンティスピースについて、インブレスの伝統が英国にどのような影響を与えたか明らかにした。ユニウスの『エンブレム集』の下絵素描のうち、どの画家が何点担当したか歴史的に実証した。

トムソンの『四季』の版画の収集・調査と、その図像学的分析を行い、18世紀の英国詩とエンブレムの関係も明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Although the research mainly clarifies the relationship between early modern British literature and emblems, it extends to the Continent and the eighteenth century. First it proves that the emblem of "Fortuna" influenced some unstable situations relating to "fortune" and "lottery" in *The Merchant of Venice* by William Shakespeare. Second, it analyzes the relationship between the emblem of the "snail" and the poem "The Snail" by Richard Lovelace from the viewpoints of the three components of "emblem:" motto, figure and epigram. Third, it proves that the tradition of "impresa," the immature type of emblem, on the Continent influenced the frontispiece of *Novam Organum* by Bacon. Fourth, it proves which painter drew how many sketch drawings of Les emblesmes by Hadrianus Junius. Last, it proves the relationship between the text and relevant illustrations and emblems in *The Seasons* by Thomson.

研究分野：英米文学

 キーワード：エンブレム イコノグラフィー Fortuna (Chance) ヘロニモ・ナダール 挿絵 くじ引き シェイク  
スピア イエズ会

## 1. 研究開始当初の背景

### 国外の研究動向

エンブレム研究は19世紀英国のエンブレム再興運動に端を発し、1970年代にドイツでエンブレム理論が整備されて欧米でエンブレム・ブックの復刻が出てから特に飛躍的に進む。最も広く研究された領域は、シェイクスピアなどの文学作品との影響関係で、1979年のデイリーの著作(P. Daly, *Literature in the Light of the Emblem*)を契機としている。この年からはミンガン大学の中世学会(the Medieval Studies Congress)で毎年エンブレムのセッションが開かれている。

デイリーは、1986年にエンブレム協会(Society for Emblem Studies)を設立し、これにはグラスゴー大学のヨーロッパ最大のエンブレム・ブックのコレクション(Stirling Maxwell Collection)を研究していたバース(M. Bath)の助力があった。同協会は定期刊行誌 *Emblematica* を発刊し、研究対象はエンブレム・ブックのなかのエンブレムに限らず、その応用表現研究も進んでいる。

最近の傾向は、スウェーデン、ブラジルなどにおけるエンブレムの受容といった地域研究が盛んになり、エンブレムの表現の研究は発展を続けている。

### 国内の研究動向と本研究の位置づけ

国外での動向と比べ、国内での展開は最近まで未開拓だったが、1970年代より岩崎宗治は、シェイクスピアのエンブレムに図像学的に取り組み、1994年に『シェイクスピアのイコノロジー』(三省堂)を出版した。さらに、最近のエンブレム研究の進展をふまえて、藤田實、入子文子編『図像のちからと言葉のちから』(大阪大学出版会、2007)、今西雅章『シェイクスピア劇と図像学』(彩流社、2008)などの成果が出、さらに英国におけるエンブレムの受容の詳細と、シェイクスピア劇の読解にエンブレム表現を応用した本研究分担者の松田による『シェイクスピアとエンブレム』(慶應義塾大学出版会、2012)が刊行予定である。また、本研究分担者の伊藤には、国外の動向に伴い、わが国のイエズス会によるキリシタン文献におけるエンブレムの影響について、論文「キリシタン版とエンブレム(1) 『平家物語』(1593年)の題扉をめぐる』(『埼玉大学紀要』)がある。美術史においても同じく1970年代に、高階秀爾・若菜みどりを紹介を始め、学会誌に出たものとして、1998年に本研究分担者の木村による「神戸市立博物館所蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》についての一考察...西洋の図像伝統から見た視点」(『美術史』)がある。

2000年以降に出た、アルチャーティの『エンブレム集』など関連文献の翻訳や、イエズ

ス会などによる宗教的エンブレム・ブックのリプリント(トロント大学出版局)の他、ライデン大学などのエンブレム文献のデジタル化により、わが国でも宗教的エンブレムの研究が可能となった。アルチャーティらの宗教的エンブレムを研究し、同時に反・宗教的とも言うべき当時の《科学》と連動したエンブレムに注目することで、近代初期英国の複雑な言説を読み解くことが可能となる。本研究が聖と俗に引き続き、宗教と科学の表象に注目する所以である。本邦では今まで文学と美術史による包括的なアプローチは未開拓で、本格的な研究は未だない分野であるが、第一次資料の充実と、専門分野の枠を超えた学際的連携によって、豊かな成果をあげることが期待できる。

## 2. 研究の目的

(1): 近代初期英国のエンブレムが如何に大陸の影響を受けたのか、同時に如何に文学に影響を与えたのかを文学・美術の両面から明らかにする。具体的には、ホイットニー、クォールズ、ウィザーらのエンブレムがオランダやフランスからどう影響を受けたか、さらに三者のエンブレムがシェイクスピアやジョン・ダン、マーヴェルらの作品にどう影響を与えたのかを探る。

(2): 市民革命以降啓蒙主義の時代にエンブレムがどのように挿絵に影響していくのかを明らかにする。具体的には、エンブレム・ブックを広く挿絵入り書物としてとらえ、18~19世紀に出版された版画入り挿絵本に描かれた表象について考察する。さらにそれらの挿絵を同時代の版画制作の観点から捉え、文学・思想史の文脈だけでなく、美術史の枠組みにおいて明らかにする。

(3): 本研究の第1の特色・独創的な点は、文学と美術の学際的研究である点、第2は英国を中心に大陸との影響関係を視野に入れた点、第3は17世紀に留まらず19世紀まで視野に入れた点である。

第1の点については、エンブレムは通常「銘、図像、警句」からなるが、文学研究者は警句に、美術研究者は図像に偏る傾向があった。本研究では両者が協力して各々の偏向を修正し、エンブレムを時代の文脈に戻したバランスのとれた研究が可能となる。例えばジョン・ダンのコンパスを奇想とした詩は一見《特異な》作品に思えるが、アントワープの「ブランタン・モレトゥス印刷博物館」の夥しいコンパス図像を見れば、当時のありふれたイメージだったことがわかる。

第2については、シェイクスピアおよびバロック演劇のエンブレムに関する邦文研究書が数点刊行されているが、いずれも英国に閉じ大陸との影響関係はほとんど論じられていない。エンブレムは1531年アウグスブ

ルクのアルチャーティに端を発し、元々大陸から英国に渡ってきたものであることを考えると、大陸との影響関係を考察しておく必要がある。さらに英国固有のクウォールズ、ウィザーらを研究するにしても大陸のエンブレム事情を踏まえておくことが賢明である。

第3については、バースが『喋る絵画』(M. Bath, *Speaking Pictures*, 1994)ですでに指摘しているが、挿絵本はエンブレムの変形と考えられる。英国で16~17世紀に流行したエンブレムが如何に挿絵となって18~19世紀に展開していくのかを出羽が研究する。18~19世紀に流行した挿絵本には、本来エンブレムに備わった警句の含意に加え、新たな連想が付与され展開していくことが分かるだろう。同じくバースが、*The Image of the Stag* (V. Koerner, 1992)で指摘しているように、傷ついた鹿のイメージも『お気に召すまま』で特徴的であることがよく知られている。しかも、それはその後、デナムの「クーパーの丘」の傷ついた鹿へと繋がり、18世紀のクーパーの『課題』にも傷ついた鹿が隠棲した著者自身を示すイメージとして特徴的であり、さらにワーズワスの「鹿跳びの泉」へと連綿とつながっていることが予想でき、その詳細を研究していく。

### 3. 研究の方法

#### 【平成24年度】

植月は、当時の博物誌のうち、特に動物のエンブレムでも、蝸牛、蜘蛛、蜂などの昆虫に注目する。これら小動物は、すでに指摘されているようにマイクロコズムの象徴とも成り得、ラヴレイス、ダン、マーヴェルなどがどのようなエンブレム・ブックからヒントを得、どのように独自の作品に昇華したのかを探ってみた。また、例えばダンの「蚤」の詩とロバート・フックの『ミクログラフィア』(1665)の有名な科学的に精確な蚤の描写とエンブレムの関係も考察した。

松田は、シェイクスピアの作品におけるテーマと関わるエンブレムについて、その相互補完的関係を追及し、一部を2011年刊行予定の著書に公開した。引き続き、近代初期英国のエンブレム文学を、ヘンリー・ピーチャムの『ブリタニアのミネルヴァ』(1612年)を中心に考察する。ピーチャムは美術論に関心を寄せ、自ら図像をデザインしたエピグラム詩人でもあった。彼はリーパを本格的に取り入れた擬人像を作成し、そこで科学的に擬人像のアトリビュートや、衣服の色彩について解釈を加えている。こうしたリーパの受容は、17世紀初頭の英国と大陸の文化の受容を考察する上で、非常に興味深い例であることを示した。

山本は、シェイクスピアのロマンス劇における「死と再生」、「別離と再会」、「誕生と蘇生」、「祈りと恩寵」などの神話的・神秘的主

題に注目して、テキストの詩的イメージや舞台装置に用いられる様々なエンブレム(的要素)を分析し、その文化的社会的背景を考察した。『ペリクリーズ』、『シンベリン』、『冬物語』、『テンペスト』において、作者がどうエンブレムを使って神秘的・祭祀的スペクタクル空間を創造したのか、作品の材源等を参照しながら考察した。

伊藤は、第一に、ホラポッコ『ヒエログリフ集』およびピエリオ・ヴァレリアーノ『ヒエログリフ集』における、星辰・動植物・鉱物など自然界の事物を題材とする象徴的なヒエログリフと秘儀的な意味付けについての研究を行った。そして第二に、ニコラウス・タウレリウス『自然的=倫理的エンブレム集』とヨアヒム・カメラリウス『シュンボルトとエンブレム集』における、植物・昆虫・動物など生物のエンブレムと倫理的な意味付けについての研究を行った。

木村は、フィリップ・ド・シャンパーニュなどの画家による寓意表現と周辺の版画家たちのエンブレム表現を、イギリスにおける事例を参照しながら研究した。フランス近世の宗教美術研究としては、E. Male, *L'art religieux après le Concile de Trente* (1932); L. Reau, *Iconographie de l'art chrétien* (1955-59); M. Fumarolli, *L'âge de l'éloquence* (1984); *L'école du silence* (1998)等がある。しかし同じ宗教美術の中でも、最もエンブレム表現に関心の高かったイエズス会図像については、まとまった研究がなかったが、近年、G. R. Dimler, *The Jesuit Emblem* (2005)のように、イエズス会全般におけるエンブレム研究の事例を確認することができた。

出羽は、18-19世紀に出版された文学作品の挿絵に対するエンブレムの影響関係を図像学的に検討する。例えば、1730年に最初の挿絵が制作され、19世紀まで数多くの作例が生み出されたジェイムズ・トムソンの『四季』の挿絵には、1709年版のリーパのロンドン版との図像学的関連を持つ作例がある。エンブレムの図像が文学を主題とした作品にどのようにして取り込まれたのかを考察した。

#### 【平成25~26年度】

平成24年度の研究を踏まえ、それぞれ以下のような計画に基づいて研究を行った。

植月は、例えばマーヴェルの「パーミュダ諸島」に登場する《海獣》の本質について、色々な可能性をエンブレムとの関係から考察した。それは具体的には鯨であり、象徴的にはレヴィアタンでもある。さらにそれは人知を越えた大気現象としての《嵐》そのものを示唆している可能性もある。《海獣》のエンブレムと当時の文学作品との関係を詳細に論じてみた。

松田は、さらにピーチャムの美術論の翻訳などにも調査対象を広げ、擬人像以外の視覚文化研究を行った。

山本は、エリザベス朝における科学や魔術の知識が、神秘的なエンブレムの世界観と拮抗しめぎ合う局面を、当時の宗教と科学の関係に注目して考察した。例えば、儀礼的な場面で使用されるエンブレムの意匠とエンブレム本との関係、ディスカバリー・スペースを活用した「死と誕生」等の演出と宗教的な図絵との関係、また、奇跡的な蘇生の演出と当時の医学とパラケルススからジョン・ディーにつながる錬金術の関係、復活の秘蹟を演出する場面と宗教劇との関係、そして、イタリア・バロックの影響を受けたイニゴ・ジョーンズが考案した数々の舞台装置と仮面劇の関係など、エンブレムの様々な影響関係を考察した。

伊藤は、ミヒヤエル・マイアーの『逃げるアタランタ』や『黄金の三脚台』の著作における、自然界の諸物質の変容を象徴的に表現する錬金術的・化学的エンブレムと神学的な意味付けについての研究を行った。

木村は、画家の寓意表現とエンブレム表現の研究を継続し、特に出版業者の存在に注目する。アントワープに本部があったプランタン商会では、ヴィーリクスを中心とした版画家集団が、多量の宗教図像上のエンブレムを制作している。それらが16~17世紀にイギリスにも流入していたことは明らかで、シェイクスピア周辺の言語表現の背景にあったと想定される。またパリにも、移動が容易だった版画がプランタン商会のパリ支店や、サン・ジェルマン・アンレー界隈を中心に活発な制作を行っていた一群のフランドル版画家たちの手でパリにもたらされていたことは、確実である [M. Grivel, *Le commerce de l'estampe à Paris au XVIIe siècle* (1986)]

出羽は、エンブレムと文学の挿絵との図像学的考察を踏まえ、エンブレムに表象された植物や風景といった自然の対象が文学の挿絵に取り込まれた時、どのような意味が与えられたのかを考察した。イギリス18世紀には、農業改革や造園といった自然の改良が科学的有用性と美的価値の両面から考察され、自然の改良、及び自然の諸対象には政治的意味が含まれることも多かった。その意味で、文学の挿絵に描かれた自然の対象には、その図像的源泉であるエンブレムとは異なるイギリス特有の意味が含まれていた可能性があり、その関係を考察した。

#### 4. 研究成果

イギリス文学とエンブレムの関係を探るグループのうち、松田は『ヴェニス商人』に「利子」を表す *usance* と *interest* に注目し、資本主義の勃興と結びつけて分析し、『ヴェニス商人』における *Fortune* と *fortune usance* と *interest* を巡ってにまとめ、*Fortuna* が *chance* として理解された点を『ヴェニス商人』を用いて例証した。

山本は、『ヴェニス商人』に出てくる宝

くじとエンブレムの関係を分析し、そこにおける *fortune* と *lottery* という言葉の劇的効果とエンブレムの関係を分析した。さらに、文学の伝統だけでなく、イタリア商人の代表的運命観やギャンブル観など当時の社会的背景を視野に入れることにより、これらの概念がどのようにヴェニスという法の支配に基づく共和制国家を舞台とする芝居の複層的意味形成貢献しているかを考察した。

さらに、『リチャード 世』の庭師のエンブレムの場面の背景に見られる伝統的世界観と科学的思考のせめぎ合いも考察した。

植月は、蝸牛のエンブレムとラヴレイスの詩「蝸牛」の関係を明らかにした。さらに、聖書に登場する庭と蛇、古典の草叢の蛇の二つの伝統をルネサンスからロマン派まで追跡し、蛇のエンブレムとの関係を指摘しながら、最終的にウィリアム・ブレイクの「病める薔薇」と虫の關係に凝縮されていることを明らかにした。さらに、『ガリヴァー旅行記』ユートピアであるフウイヌムの背景にある馬への虐待の実態を明らかにする過程で、馬のエンブレム、絵画などに言及し、その普及に影響したことを議論した。ほかには、グレイの猫に関する詩の猫と金魚について、ウィリアム・ブレイクが描いた挿絵なども考慮し、詩作品とエンブレムとの関係を考察した。

大陸のエンブレムの研究グループのうち、木村は、ユニウスの『エンブレム集』の版画について研究を行った。挿絵の下絵素描は、パリの画家バランが52点を担当し、アントウェルペンの画家ハイスが、残りの6点を引き継いだ点を歴史的事実に研究した。さらに、フランス革命期の版画家ドゥビュクールが制作した寓意図像の作品の中で、1787-94年にかけての作品群に集中し、18世紀に刊行されたションプレ並びにド・プレツェルの図像事典との関連について分析を行った。さらに、フランス革命期の「友愛」という政治的理念に関する図像が、画家ダヴィッドを中心とした制作環境との関係から分析した。

伊藤は、ホラポットの『ヒエログリフ集』の邦語訳を行いつつ、とりわけ、星辰・動植物・鉱物など自然界の事物を題材とする象徴的なヒエログリフと秘儀的な意味付けについて、典拠の探索、および同時代・後代への影響について研究を行った。フランシス・ベイコンの『大革新』のフロンティスピースについて、大陸の、とくにインプレーサの伝統がイギリスにどのような影響を与えたか、その一端を明らかにしつつ、ベイコン思想の分析を背景にその特色について指摘した。最終年には、ナダールの作品(1593)に先だって刊行された「図解福音書」(1573)の内容を分析し、『ヒイデスの導師』(1592)の題扉への影響について研究した。

最後に、18~19世紀に出版された文学作品を主題とした版画(挿絵、及び独立した版画作品)に対するエンブレムの影響関係を図像学的に検討する出羽は、基礎的な作業として、

特にジェイムズ・トムソンによる詩『四季』の版画の収集・調査と、その図像学的分析を行い、18世紀のイギリス詩とエンブレムの関係を明らかにした。イギリス 18 世紀の文芸作品本文と挿絵の関係を主題とし、文芸作品の挿絵および文学を主題とした絵画に対するエンブレムの影響を考察するために、とくにジェイムズ・トムソンの詩作品を主題とした挿絵と絵画の考察を行い、トムソンの詩『四季』などの挿絵、詩行、絵画、寓意図像との関連を検討した。

以上、3年間の研究から、17世紀イギリスのエンブレム事情から、当時の演劇、詩などに大きな影響を与えており、さらにそれは大陸の膨大なエンブレムの伝統に支えられたものであり、さらに 18 世紀イギリスの文芸作品、およびその挿絵、絵画などの作品制作の根本にも大きな影響を与えたものであることが判明した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 23 件)

1. 出羽 尚、トムソンの『自由』とブリタニアの図像、宇都宮大学国際学部研究論集、査読有、39、2015、1-14 頁。
2. 伊藤 博明、キルヒャーとオベリスク、19世紀学研究、査読無、9、2015、39-72 頁。
3. 伊藤 博明、布教とイメージ ある「図解福音書」(ローマ、1573 年刊)について、エンブレムの諸相、査読無、七月堂、2015、7-42 頁。
4. 伊藤 博明、天使と星辰が交わる場所 サンタ・マリア・デル・ポーポロ聖堂 キーヅ礼拝堂、Musica mundana 気の宇宙論・身体論第 1 巻、査読無、2015、99-126 頁。
5. 植月 恵一郎、熊の『マクベス』、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、61、2015、13-20 頁。
6. 木村 三郎、プッサン作《アポロとダフネ》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)について(その 2)、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、61、2015、21-39 頁。
7. 出羽 尚、Some facts of Richmond Hill in the time of Turner's Richmond Terrace, Surrey、宇都宮大学国際学部研究論集、査読有、38、2014、89-98 頁。
8. 伊藤 博明、シビュラの行方 アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで(特集 中世とルネサンス: 継続/断絶)、西洋中世研究、査読有、6、2014、88-112 頁。
9. 植月 恵一郎、馬のイングランド フウイヌム の虚実、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、59、2014、65-74 頁。
10. 植月 恵一郎、グレイの猫 「金魚鉢で溺死した愛猫に寄せるオード」(一七四七)について、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、60、2014、23-32 頁。
11. 植月 恵一郎、異界探訪 竜退治の成立過程、『イメージの劇場 近代初期英国のテキストと視覚文化』、査読無、英光社、2014、136-170 頁。
12. 木村 三郎、フランス革命期における「友愛」の図像について、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、60、2014、33-52 頁。
13. 山本 真司、松田美作子著『シェイクスピアとエンブレム 人文主義の文化的基層』、慶応義塾大学出版会、2012 年、313pp、英文学研究、査読有、91、2014、46-52 頁。
14. 山本 真司、"Your fortune stood upon the caskets there" (3.2.201) 『ヴェニス商人』における「三つの小箱選び」の文化的背景とエンブレムの解釈の新たな可能性、天理大学おやさと研究所年報 = Annual bulletin of Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University、21、査読無、2014、35-74 頁。
15. 出羽 尚、挿絵から見る『四季』 落穂拾いのラヴィーニアの表現を中心に、イギリス・ロマン派研究、査読有、37、2013、1-18 頁。
16. 出羽 尚、J・M・W・ターナー作《トムソンのアイオロスの豎琴》の主題と着想、国学院大学紀要、査読有、52、2013、31-56 頁。
17. 植月 恵一郎、『お気に召すまま』鹿狩を、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、58、2013、61-74 頁。
18. 木村 三郎、プッサン作《アポロとダフネ》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)について、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、57、2013、65-78 頁。
19. 木村 三郎、版画家フィリベール=ルイ・ドゥビュクール制作の一七八七~九四年における主要作品 フランス革命期の寓意表現を中心に、日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、58、2013、75-87 頁。
20. Saburo Kimura, "Qui est le modèle du « ROI DE NAGASAKI » ? Sumitada ÔMURA immortalisé en France au XVIIe siècle." *Les Cahiers d' Histoire de l' Art* (Sommaire n° 11, 2013), 23-30.
21. 松田 美作子、Representations of the Color Green in Shakespeare、成城文藝、査読有、225、2013、142-130 頁。
22. 木村 三郎、プッサンとヴィーリクス、

日本大学芸術学部紀要 = Research in arts、査読有、56、2012、61-74 頁。

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 木村 三郎、フィリップ・ド・シャンパーニュ作《煉獄の魂》について ヴィーリクスとその影響、科学研究費シンポジウム《イメージは語る 「新」・「旧」 両大陸における主教画像とテキストの相関》、2014 年 11 月 29 日、成城大学。
2. 山本 真司、『ヴェニス商人』の小箱 (casket) をめぐるエンブレムの解釈について、天理大学おやさと研究所第 271 回研究報告会、2014 年 6 月 12 日、天理大学。
3. 出羽 尚、画家は詩をいかに読んだか ターナーの風景画と英詩、イギリス・ロマン派学会四季談話会、2014 年 5 月 10 日、日本女子大学。
4. Hiroaki ITO, Missions and Images: On an Evangelical Illustrated Book Published at Rome in 1573, The 10<sup>th</sup> International Conference of the Society for Emblem Studies, August 1<sup>st</sup>, 2014, Kunsthistorischen Institut der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel.
5. 松田 美作子、近代初期テキストにおける device/devise シェイクスピアを中心に、十七世紀英文学会関西支部、2014 年 3 月 16 日、大阪 YMCA 会館。
6. 木村 三郎、ラ・ヴリリエール邸の絵画コレクションと建築家マンサール、日仏美術学会、2013 年 10 月 12 日、日本大学芸術学部。
7. 伊藤 博明、インプレーサからエンブレムへ フランシス・ベイコン『大革新』のフロンティスピースをめぐって、日本シェイクスピア協会第 52 回全国大会、2013 年、10 月 6 日、鹿児島大学。
8. 山本 真司、“Your fortune stood upon the caskets there” (3.2.201) 『ヴェニス商人』における “fortune” と “lottery” のエンブレム政治学、日本シェイクスピア協会第 52 回全国大会、2013 年 10 月 5 日、鹿児島大学。
9. 伊藤 博明、Missionaries and Images: On an Evangelical Illustrated Book Published at Rome in 1573, ルネサンス研究会、2013 年 5 月 15 日、学習院女子大学。
10. 山本 真司、エリザベス朝の庭師、その仕事と世界観 Thomas Hill 著『The Gardner's Labyrinth』(1577)再読、イギリス・ガーデン研究会第 6 回例会、2013 年 3 月 29 日、無鄰庵(京都府)。
11. 山本 真司、The Emblematic Politics of Lottery in Early Modern England、天理大学 EU 研究会第 15 回研究会、2013

年 1 月 10 日、天理大学。

12. 山本 真司、シェイクスピア・エンブレム研究の現在 松田美作子著『シェイクスピアとエンブレム』を中心に、日本エンブレム協会例会、2012 年 12 月 10 日、成城大学。
13. 出羽 尚、ジェームズ・トムソンの『四季』図像について、イギリス・ロマン派学会全国大会、2012 年 10 月 21 日、熊本大学。

〔図書〕(計 2 件)

1. 出羽 尚、伊藤 博明、植月 恵一郎、木村 三郎、松田 美作子、山本 真司、『エンブレムの諸相』七月堂、2015、総 234 頁。
2. 松田 美作子編『イメージの劇場 近代初期英国のテキストと視覚文化』英光社、2014、総 244 頁。

〔その他〕

ホームページ等

日本大学デジタルミュージアム、「Ovid's Metamorphoses」

<http://ovidmeta.jp/search/p/index.php>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植月 恵一郎 (UETSUKI, Keiichiro)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：10213373

(2) 研究分担者

木村 三郎 (KIMURA, Saburo)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：00130477

出羽 尚 (IZUHA, Takashi)

宇都宮大学・国際学部・専任講師

研究者番号：00434069

松田 美作子 (MATSUDA, Misako)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10407611

伊藤 博明 (ITO, Hiroaki)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：70184679

山本 真司 (YAMAMOTO, Shinji)

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：80434976